

## 『英英伝』における主人公の滑稽と色好みについて

李 興 淑

はじめに

『英英伝』は、17世紀初期の韓国の漢文愛情伝奇小説で、若い儒生である金生と檜山君（1481～1512）の宮女（女官）である英英の愛を描いたもので、作者および詳しい創作年は未詳である。作品名は他に『相思洞記』、『相思洞餞客記』などがある。『英英伝』は、同年代成立の『雲英伝』と物語の素材が酷似<sup>1)</sup>していることから、その模倣作である<sup>2)</sup>とか、同作者説がよく指摘されている<sup>3)</sup>。このような事情から『英英伝』の研究は、『雲英伝』との比較研究が主である<sup>4)</sup>。『英英伝』が、『雲英伝』および同時代の他の漢文愛情伝奇小説と比べて大きく異なる点は、「扇情的叙述方式」<sup>5)</sup>にある。

本稿では、『英英伝』の主人公金生における滑稽と色好みについて考察する。これまで議論されることのなかった金生における滑稽と色好みの性向を浮き彫りにし、本作品の面白さと文学性をより幅広く読み解いてみたい。

## 1 金生の恋の成就過程について

主人公金生については、『英英伝』の冒頭で次のように語られる。

弘治中、有成均進士金生者、忘其名。爲人容貌粹美、風度絶倫。善屬文、能笑語、眞世間奇男子也、郷里以風流郎稱之<sup>6)</sup>

※弘治中、成均の進士、金生といふ者有り、其の名を忘れる。爲人は、容貌、粹美にして、風度、絶倫なり。善く属文し、能く笑語し、眞に世間の奇男子なり。郷里は風流郎を以て之を称す。

要するに、金生は美男子で学問にも優れ、なお、面白い人物ということが分かる。特にここで注目したいのは、冗談をよく言う彼の性向である。金生のユーモラスな性格は、彼の恋が成就する過程においては可笑しい行動に及び、それが滑稽の様相を呈するようになる。

金生の人物像は、上記の引用文にあるように、容貌と知性を兼備し、しかも面白みのある風流人として位置づけられている。特に彼の性格は、恋愛においてよく表れており、恋の成就のためなら妙な行動もためらわない、積極的で大胆な人物として描かれている。

まず、彼は恋の成就のために、下僕から教わった計略通り、いもしない架空の人物を作り出し、その人物を自分の所に連れて来い、と三日にもわたっておかしな嘘の演技を繰り返す。また、恋愛の助力者の一人である老婆には、男女関係と深い係わりのある場違いの贈物をしたり、ある時は、酔っぱらったふりをしてわざわざ馬から転げ落ちて道端に倒れたりもしている。このようなおかしな行為は、恋を成就させるための手段であり、事実、これらにより恋を成就することができた。

金生の恋は、三人による助力と自らの積極的な行動によって成就される。もし、これらが一つでも欠けたらそれが成功することはなかった。助力した三人というのは、下僕の莫同、友人の李正子、英英の叔母である老婆であり、彼らは金生の恋の成就に非常に重要な役割を担う。下僕と友人は、元々金生と親密な関係にあり、老婆と金生の関係は後に親密なものに進展する。積極的な金生の行動と三人の助力者との緊密な連携により、恋が成就する過程は、次のように三段階に整理できる。なお、ここで注目したいのは、金生の積極的な行動は、それが意外にも知識人における滑稽へと転じて笑いを誘う点である。

最初の段階は、金生が下僕の莫同の計略の通り嘘の演技をして、英英の実家たる老婆の家に潜入することができたことである。二人は主人と下僕という主従の関係にあり、金生は下僕の助力を得て、なおかつ自分の積極的な行動で、英英に一步近づくことができたのである。

次の段階は、老婆の家に入った金生が、老婆に高価な合歡単衫を脱いで与え（後ほどこの解釈を再考する）、それにより老婆の助力を得て英英に会うことができたこと。金生は、元々お金がなく着ていた白紵単衫を質に入れてお酒を飲むような貧しい若者として描かれており（生不勝春情之惱、思醉如渴。遂典白紵單衫、沽得眞珠紅酒、酌以花磁盞、飲之）<sup>7)</sup>、そんな彼が、相当無理をして高価な合歡単衫を老婆に贈る（普段着の白紵単衫より高価で、若い女性用の衣とみなす。これについては後で触れる）。このような可笑しい場違いの贈物とそのため金銭的な無理をする若者の姿は、どこか滑稽を感じさせる。この二人のやりとりについては、後ほど詳しく論じる。

最後の段階は、その後暫くして老婆が死に、英英と会う途が途絶えてしまう中、ある日、金生は英英の邸宅の前を馬に乗って通りかかることになる。そこで、金生は酔っぱらったふりをして馬から転げ落ち、道端に倒れて、邸宅の中に運び込まれ、そこで英英と密かに対面する。しかしその後、英英と再会するすべがなく、恋煩いで病床にふしてしまう。見舞いに来た友人からその邸宅の夫人が自分の叔母であるということを聞かされ、その後、その友人の助力で二人は結ばれることになる。結局のところ、金生のニセの落馬事故という彼の行動が、友人の助力につながり彼の恋は成就されたのである。

以上のように金生の恋の成就是、彼の行動力と三人の助力との密接な連携によるものであった。上記の三段階を表で示すと次の通りである。

	助力者との関係	金生の積極的な行動（滑稽）
①	主従関係	下僕の助力⇒嘘の演技
②	主客関係	場違いの贈物⇒老婆の助力
③	友人関係	嘘の演技⇒友人の助力

## 2 「合歡」の解釈をめぐって

上記の表の②の金生と老婆とのやりとりについて詳しくみたい。金生は、①の段階の莫同の計略と自分の嘘の演技が成功し、老婆と一緒にお酒を飲むという②の段階まで進むことができた。この②の段階では、金生は老婆に場違いの贈物をするという可笑しい行動にでる。その後、老婆

の協力を得て金生は英英と会える。以下、金生が老婆に贈物をする前後の場面である。

酒闌、生輒解紫緋合歡單衫、投之於媪、而與之曰、「每煩媪家、無以爲報、以此爲信、以備他日不忘之資也。幸媪勿却。」媪感之深、又疑之甚、即起而再拜曰、「郎君之賜至此、則老身之感滋甚。意者、或有所以然而然耶？丁寧老身、寡居多年、凡在隣里者、恒無顧藉、況於郎君乎？就令郎君有所望於老身、雖死不辭也。」<sup>8)</sup>

ここで問題となるのは、下線部の「生、輒ち紫緋を解き合歡単衫、之を媪に投けて」の「合歡」<sup>9)</sup>のハングル訳である。「合歡」は大漢和辞典によれば、「喜びを共にする、親しみ合う、男女または夫婦の共寝、ねむの木」などの意味があり、韓国の辞典もまた同じである。しかし、「合歡」のハングル訳を見ると、訳は分かれており、「合歡」が具体的になにを指しているかは明らかにされていない。次は、主要な六つのハングル訳の例であり、日本語に直訳したものである。③を除く他は、韓国漢文学を専門とする研究者の訳である。

- ① 酒がほどよく酔うと、金生はふいに赤い風呂敷をほどき、絹の赤衫一つをその老婆にあげながら言った。<sup>10)</sup>
- ② 酒がほどよく酔うと、金生はふいに赤い風呂敷をほどき、絹のチョゴリ（上着）一つをその老婆にあげながら言った。<sup>11)</sup>
- ③ 酒席が終わると、金生はふいに紫色の赤衫を脱ぎ、老婆に渡しながら言った。<sup>12)</sup>
- ④ 酒席が盛り上がると、生はふいに紫色の合歡赤衫を脱ぎ、老婆に渡しながら言った。<sup>13)</sup>
- ⑤ 酒を全部飲み終えた後、金生はふいに紫色のチョゴリ（上着）を脱ぎ、単衫にぐるぐるに丸めて老婆に投げ与えながら言った。<sup>14)</sup>
- ⑥ 酒席が終わると、生はふいに紫緋合歡單衫を脱ぎ、老婆に渡しながら言った。<sup>15)</sup>

上記の六つのハングル訳は「紫緋」の訳を含め様々な問題があるが、ここでは「合歡単衫」についてのみ検討したい。「合歡単衫」を複合名詞と見た場合、①、②、③、⑤の四つの訳では「合歡」は全く訳されず排除されており、④、⑥のみが「合歡」の「単衫」として捉えられている。しかし、この「合歡単衫」がどのような単衫（＝赤衫）であるかについては、朝鮮時代の衣服史においてもその用例が全くなく不明である。上記の六つのハングル訳の中で唯一、⑥が原文の「紫緋合歡単衫」に注釈をつけ、「紫色の単の単衫」であると注記したうえで、「合歡」については「共に喜ぶまたは性関係を意味する、ネムノキを指す」と注記している。結局、⑥も「合歡単衫」がどのようなものであるかについては注記しておらず、不明のままである。

興味深いことに、18世紀の知識人ですら今と同じく「合歡」についてよく知らなかったことが、李瀾（1681～1763）の『星湖僊説』（1740年頃成立）の記事から分かる。李瀾は「合歡」の項目を立ててその中で、詩家（中国漢詩）に多く言われている「合歡」を翻訳者が『本草』にある「合歡樹」を以て解いているがそれは誤りだとし（詩家多言合歡釋者以本草合歡樹為解非也）、鄭注を引用しながら「合歡」について色々と説明を加えている（卷之四萬物門）<sup>16)</sup>。

合歡が複合名詞として使われる場合、その用例はほぼ漢文学に見える。例えば、「合歡被」<sup>17)</sup>（合歡衾とも、男女が共寝しながら楽しむという意味を込めた布団。花や鴛鴦などの文様を対称に並べて刺繍）、「合歡扇」<sup>18)</sup>（対称に合わせて作った扇、恋愛の漢詩に多く見られる）、なお、衣服に使われる場合は、「合歡帶」<sup>19)</sup>（夫婦の契りを結んだしるしの帯）、「合歡襦」<sup>20)</sup>（二匹の鴛鴦

を描いた短い衣、主に若い女性用の衣か）などがある。韓国で唯一その用例があるのが伝統婚礼の時の「合歓酒」（新郎新婦がお互いに杯を交換して飲む酒）である。以上を踏まえて考えると「合歓単衫」も他の用例と同じく男女関係に深い関係のある単衫か、あるいは、「合歓襦」のように単に鴛鴦の文様の綺麗な刺繍が施されている単衫のように考えられる。しかし、両方どちらにしても老婆への贈物としてはふさわしくない物である。

朝鮮時代の男性の単衫（＝赤衫）というのは、一般的に紵、麻、綿布の無地の生地で作られており、韓国の「国立民族博物館」所蔵の朝鮮時代の衣服資料の単衫も同じである。金生も同じく日ごろ「白紵単衫」を着ていることが描かれている。これらから考えると、金生が原色の生地にしかも一對の鴛鴦の刺繍が施されている「合歓単衫」を着ていたとは到底考えにくく、従来とは異なる視点での再検討を要する。

それで、金生における滑稽と色好みの観点からみると、「酒闌、生輒解紫緋合歡單衫、投之於媼、而與之曰」の場面は、青年と老婆との契りの場面の可能性を秘めている。すなわち「合歡」を契りという意味の動詞とみなし書き下しにすると、「酒闌けて、生、輒ち紫緋を解き合歡し（合ひ飲び）、単衫、之を媼に投げて之を与へて曰く」（酒席が終わると、金生はふいに紫色のチョゴリ（上着）を脱いで契り、単衫（下着）を<sup>21)</sup>老婆に投げて与えながら言った）のようになる。

### 3 金生における好色について

『英英伝』の「合歡」が契りの意味に解釈できる二つの根拠について述べてみたい。まず、金生が、恋の成就のためなら、なりふり構わず馬鹿げたことまでもする人物ということである。老婆は英英に会えるキーパーソンであり、なんとしても親密になり、自分の恋を叶えたいとたくらんだはずである。そこで金生は老婆と寝るという大胆な行動に出て、それにより目論見通り老婆は、英英に会えるように計略を立てるなど色々と尽力し、彼の目的は達成される。

二つ目は、金生が女主人公の英英に対して露骨な性的アプローチをする人物として描かれているためである。金生は事あるごとに欲情の赴くまま、英英に肉体関係を迫る。しかし、先行研究では、決して金生を色好みとはみなさない。韓国の愛情伝奇小説の表現技法の一つとしてみるからである。とはいうものの、同時代の他の愛情伝奇小説と比べてみるとその強引さは尋常なものではない。ということで、筆者は金生の人物造型の底辺には少なくとも色好みの性向がベースにあると推察する。以下、金生における色好みの内容である。

老婆の助力によりやっと英英に会えた金生は、初対面にも拘わらず英英に同衾を申し込み、彼女に断られる（生欲留英于此、乃以繼夜、要以同枕。英不可曰<sup>22)</sup>）。その後も金生は、彼女を抱こうとしてまたしても拒絶される（遂欲狎之、英斂衽正色曰<sup>23)</sup>）。それでも金生は諦めることなく半ば強制的に彼女の太腿を撫でながら、自分の思いを訴え、ついには彼女の手を握ったり胸を触ったり、脚を重ねたり色々と彼女に迫ったが、結局、彼女に受け入れてもらえず肉体の交わりまでには至らなかった。次はその場面であり、「飲」の字が契りの意味に使われている点が注目される。他の場面においても「飲」の字が契りの意味に使われている。<sup>24)</sup>

生、髀を拊で歎きて曰く：「予、豈に生きられんや、其の泉下の人と為りや」と。遂に其の素ひ手を執り、其の素ひ乳を捫で、其の玉脚を接ぎ、唯だ心の欲する所、為さざる所無けれども、強い歡びに至りて、則ち不可なり。<sup>25)</sup>

以上で見たように、金生は英英の頑固たる拒絶にも拘わらず、引き続き彼女の欲情を促そうとしたり、あらゆる口説き文句を並べて彼女を誘惑するが、結局受け入れてもらえなかった（生鼓情竭誠、百端誘之曰、(中略)、英終不肯隨曰)<sup>26)</sup>。金生に執拗に迫られた英英は、彼に対して自分に気があるのであれば今夜ではなく、後日に会うことを提案するが、彼はそれを断り（「郎君如致意於賤妾、可於他日相尋」。生不可曰<sup>27)</sup>、なんとしてもその晩に英英と交わりたいと思い奮闘するも結局、その晩は思いを遂げられずに彼女と別れた。

後日、英英が仕える邸宅に忍び込み、離れに身を隠して彼女を待っていた金生は、またしても再会するや否や彼女の上着を脱がした（即把英之衣襟而解之<sup>28)</sup>。英英は彼のそのような衝動的な行為を止めさせ、なぜ桑畑の中で遊ぶ女のような扱われ方をされるのかと問いただし、なお、寝室は別にあるので、そこで楽しい夜を過ごそうと説得し、彼の求めには応じなかった（英止之曰：「郎君何以妾、如桑中遊女乎？別有寢房一所、可於其間隱度良夜」<sup>29)</sup>。二人は英英の部屋に場所を移し、彼女はまず荷葉(の葉)の杯にお酒をくんで金生に勧めた。しかし彼は、自分の心はお酒にあるのではなく、情けにあるとしその杯を受け取らず、それを片付けさせた（遂以金荷葉盞、酌而勸生、生辭曰：「在情、不在酒也」、仍命撤去<sup>30)</sup>。こうしてようやく金生の思いは遂げられた。

おわりに

以上、金生における滑稽と色好みについて考察しながら「合歡」の解釈をめぐる問題についても考えてみた。主人公金生の人物造型には、滑稽や色好み内在されていると考えられた。また、主人公の滑稽や色好みの側面から考えると、「合歡」の解釈は再考されるべきだと思われた。『英英伝』の冒頭に、金生は齢わずか二十歳にして科挙試験に合格し、その名は都にとどろいたとある（年甫弱冠、登進士第一科、名動京華<sup>31)</sup>。なお、公卿や大家は愛娘を金生に嫁がせたいと思い、そのためにはお金を惜しまなかったと語られている（卿大家、願嫁愛女、約不論財貨也<sup>32)</sup>。金生は、事あるごとに、漢詩を詠んでおり、それらには漢文学の引用も非常に多く、本稿で見えてきたような可笑しい行動と色好みという性向だけではなく、非常に知性も高い若者である。本作品は、主人公の知性に滑稽さと色好みバランスよく絡み合い、若者の恋物語がより一層面白みを増していると思われる。

(注)

- 1) 二つの作品とも男主人公が進士科に合格した若い儒生、女主人公は実在した人物に仕えた女官で

あり、脇役の下僕や女などの助力者の役割が類似している。

- 2) 蘇在英『古小説通論』(396頁、イウ出版社、1983年)。
- 3) 『相思洞記』の「解題」(張孝鉉篇『校勘本 韓国漢文小説 傳奇小説』民族文化資料叢書Ⅰ、高麗大学校民族文化研究室、2007年)。
- 4) キム・ナキョウ「〈英英伝〉と〈雲英伝〉の比較研究」(『東アジア文化研究』vol.18、漢陽大学校東アジア文化研究所、1990年)。
- 5) 注3)に同じ。17世紀に扇情的な愛情小説がほぼないのは、当時の文学史の背景にあるものと考えられる。張孝鉉氏の『韓国古典小説史研究』(「韓国古典小説に及ぼした中国小説の影響史」616～617頁、高麗大学校出版部、2009年)によると、18世紀の士大夫たちは、「淫褻で荒怪」な小説が「天下の風俗を乱し」、また、「淫詞小説を見ると知らないうちに、流蕩な心が生じる」として警戒していたとされる。張孝鉉氏は、当時の文献の記事を引用して述べているが、時代はやや遡るが士大夫たちのそのような考えは17世紀にも存在し、小説創作において扇情的な描写が忌避されることに繋がっていたと考えられる。
- 6) 引用文は、張孝鉉篇『校勘本 韓国漢文小説 傳奇小説』(民族文化資料叢書Ⅰ、高麗大学校民族文化研究室、2007年)の本文を用いる。以下同じ。本文を校訂し改めた場合はそのつど明記する。
- 7) 生、春情の惱に勝へず、思ひに酔ふこと渴くがごとし。遂に白紵の単衫を典し、眞に珠紅酒を沽得し、花磁の盞を以て酌し之を飲す。
- 8) 酒闌けて、生、輒ち紫緋を解き合歡単衫、之を嫗に投げて之を與へて曰く、「毎に嫗家を煩したれども以て報ひと爲すもの無し。以て此を信と爲し、以て備へば他日の不忘の資となり。幸はくは嫗、却すこと勿れ」と。嫗、之を深く感ずれども、又、之を疑ふこと甚だし。即ち起ちて再拜して曰く、「郎君の賜此に至り、則ち老身の感、滋甚だし。意は、或ひは所以有るか、然而ども然るや、丁寧、老身は寡居、多年たり。凡そ隣里に在る者は、恒に顧藉すること無し。況んや郎君においてをや、就令ひ、郎君、老身に所望すること有らば、死すと雖も辞せざるなり」と。
- 9) 19種ほどある写本の中で、イ・ヒョンホン本のみが「歡」の字がなく「合」のみである。引用した六つのハングル訳は、この写本を用いず、全て「合歡」の文を有している。
- 10) 金起東・全圭泰編『報心録 英英伝』(韓国古典文学、ソムンダン、1984年)。
- 11) イ・ヨンホ『淑英娘子 英英伝』(鷄林、2007年11月)。
- 12) イ・デヒョン訳『周生伝 英英伝』(玄岩社・2011年12月)。
- 13) イ・ミラ他訳『三芳録』(韓国漢文小説集翻訳叢書、ボゴ社、2013年)。
- 14) イ・サング訳注『十七世紀愛情傳奇小説』(月印、2015年修正版)。
- 15) バク・サンソク他訳『花夢集』(韓国漢文小説集翻訳叢書、ボゴ社、2016年)。
- 16) 『新編 国訳星湖僊説』(古典国訳叢書、民族文化推進会編、韓国学術情報、2007年)。
- 17) 白居易「庾順之以紫霞綺遠贈以詩答之」(前略) 不如縫作合歡被、寤寐相思如對君)
- 18) 班婕妤「怨歌行」(前略) 裁為合歡扇、團團似名月、出入君懷袖(後略)。高麗時代の李達衷(?～1385)「閨情」(贈君同心結、貽我合歡扇、君心意不同(後略))
- 19) 張昱「晚春辭」(前略) 結成合歡帶、自置妾懷袖、覺來風張幔、啼鳥在高柳(後略))
- 20) 辛延年「羽林郎」(前略) 胡姬年十五、春日獨當爐、長裾連理帶、廣袖合歡襦(後略))
- 21) 夏以外はチョゴリ(上着)の下に着る下着。この場面は春なので下着とみなす。
- 22) 生、此に英を留め、仍りて以て夜を継ぎて、要めて以て同枕せんと欲す。英、不可なりと曰く。
- 23) 遂に之を狎せんと欲せば、英、斂衽し色を正して曰く。
- 24) 無吝乎半餉之歡(半餉の歡び、吝しむこと無からんや)。生は、同衾せず帰ろうとする英英に対して、暫くの間、同衾だけでも受け入れてほしいと訴える場面で、この後すぐに英英をむりやり襲おうとする場面が続く(遂欲狎之)。
- 25) 生拊髀而歎曰：「予豈生乎？其爲泉下人哉！」遂執其素手、捫其酥乳、接其玉脚、唯心所欲、無所不爲、至於強歡、則不可也。「強歡」は、慎獨齋本、釜山大本、ナソン本、国図館ナ本、金起東編本、高麗大本、全南大本、延世大本により、「講歡」を校訂し改めた。
- 26) 生、情を鼓させんとし誠を竭くし、百端に誘ひて曰く、(中略)、英、終に隨ふこと肯かず曰く。

- 27) 「郎君、賤妾に意を致し如んば、他日に相ひ尋ねるべし」と。生、不可なりと曰く。
- 28) 即ち英の衣の襟を把りて之を解けば。
- 29) 英、之を止めて曰く：「郎君、何を以て妾に、桑中の遊女の如きや、寢房の一所別に有り、其の間に隠れて良い夜を渡るべし」と。「桑中」は、「桑間」を校訂し改めた。「桑間」は釜山大本のみで、他の18種は「桑中」。
- 30) 遂に金の荷葉の蓋を以て、酌し生に勧める。生、辞して曰く：「情に在り、酒にあらず」と。仍りて撤去を命じる。
- 31) 年、甫めて弱冠にして、進士第一科に登り、名は京華を動かす。
- 32) 公卿、大家、願はくは愛女を嫁さんとし、約ぼ財貨を論ぜざるなり。